

2013 年度 大阪大学言語社会学会・言語文化学会 合同研究発表会
(大阪大学言語文化学会第 43 回大会)

2013 年 6 月 27 日 於大阪大学箕面キャンパス

発表要旨 (言語文化学会会員分)

第 1 会場 (E101 教室)

英語理療学療法論文における後置修飾―「人」を表す名詞と傷病名との関係性

八野幸子 (言語文化専攻博士後期課程)

英語理療学療法論文の特徴に関する研究は、現在のところ、語彙に関する研究が数例あるが、その数は少なく、まだまだ明らかにすべき課題が多く残っている。とりわけ、文法に関する研究はほとんどなく、これらを明らかにすることは、教育的側面から意義があると考え本研究に至った。

本研究は、英語理療学療法論文に出現する後置修飾の特徴を、「人」を表す名詞、および傷病名との関係性から、明らかにしようとするものである。

本研究の第一段階として、医療系の文脈に多く現れることが予測される patients の共起語を、発表者編纂の 2 つの英語理療学療法論文コーパスで検索した。その結果、両コーパスにおいて、前置詞 with が圧倒的な頻度で patients と共起することがわかった。さらに、この with の後には傷病名が多く現れることがわかった。この点に着目し、さらに視野を広げ、patients 以外の「人」を表す名詞について調査を行った。with との共起関係をもとに、patients 以外の「人」を表す名詞を抽出し、抽出された語に対する後置修飾においても、patients に見られたのと同様の傾向がみられるかどうかを with の後ろに出現する傷病名との関係性を軸として調査した。この調査において、前述の方法で抽出された「人」を表す名詞の中から、一般の文脈においても出現するが、医療系用語としての意味をもたない、people, persons, children, adults などには特に焦点を当てた。またこれらの名詞と他の後置修飾法、とりわけ、現在分詞によるもの、関係代名詞 who によるものと傷病名との関係性についても比較を行った。

加えて、後置修飾の使い分けに関して、教育に応用する場合に参考となる何らかの示唆が得られるかどうかについても考察した。これら一連の調査結果を本発表において報告する。

The Monitoring and Feedback on the Process of Language Acquisition
- Economics on the Process of Language Acquisition -

森本圭子 (言語文化専攻博士後期課程)

The Monitoring and Feedback of Natural Conversation (森本：2012) では、日本語と英語の母国話者は、常に、自分たちの言葉をモニター、フィードバックをし必要に応じてその言葉を訂正すると述べた。日本語(主語+目的語+動詞)と英語(主語+動詞+目的語)は語順が異なる。そして、それゆえ、両方の母国話者はそれぞれ異なる表層でモニター、フィードバックしているかのように見える。しかし、構造的には、それぞれの話者は、文のレベルで、自分たちの言葉をチェックし、必要ならばそれを訂正し、そこから又、次の文を生成するように見える。

更に、The Monitoring and Feedback on the Process of Language Acquisition -Economics on the Process of Language Acquisition-では、その結果として、考察できることは、日本語と英語の母国語話者は、効果的に文を作る為（時間とエネルギーの観点から）に、語順は異なるが、文のレベルで自分たちの言葉をモニター・フィードバックしそして、必要ならば文を生成しているのではないかということを具体的に、日本語の母国語話者の発話と英語の母国語話者の発話を提示しながら、論じたいと思う。

触覚に関する共感覚表現の再考

大谷友也（言語文化専攻博士後期課程）

本発表は、共感覚表現の研究において分類基準となってきた「五感」という概念について、特に触覚に関する表現に着目しながら再考する。Ullmann(1957)や Williams(1976)は共感覚表現の転用に一定の傾向があるという、いわゆる一方向性仮説を提唱した。しかし彼らを始め、共感覚表現に関する先行研究の多くは言語学的な裏付けの無い「五感」という伝統概念に固執してきた。そのため分析は綿密さに欠き、共感覚表現の動機付けの説明も不十分である。一方で山口(2003)らは、共感覚表現はメタフラーやメトニミーが複雑に関わった様々な動機付けによって成立する事を指摘し、一方向性仮説に反して例外的に成立する転用表現の根拠を示した。しかし、一方向性仮説で予想されるにもかかわらず成立しない逆の例外については説明されていない。これらの先行研究の問題を解決するために、本発表は「五感」の細分化を試みる。特に触覚について、痛覚、熱感覚、テクスチャ感覚などへの細分化が可能であり、この分類を用いて Williams のデータを再分析するとそれぞれの下位感覚に固有の転用傾向が見出せる事を示す。また下位感覚同士の間でも表現転用があり、それにも転用方向の傾向が見られる。すなわち触覚は一つの総体ではなく、それぞれの下位感覚が異なる動機付けで他の感覚への転用表現を形成していると考えられる。動機付けの説明には認知言語学の基本概念である身体性(Lakoff 1987)を用いながら、従来の研究からより詳しく分析する。用例についてはコーパスなども活用し、独自にデータを収集し発表する。

第2会場 (E102教室)

閩南系台湾人の使用言語選択における要因—台北、台中、嘉義からみる—

呉素汝（言語文化専攻博士後期課程）

本研究は、台北・台中・嘉義の3地域在住で、それぞれ日本語世代、第二世代、第三世代の閩南系台湾人の3グループを対象とし、クースタダイを通して日本統治時代から現在に至るまでの彼らの言語生活の実態と使用言語選択の根拠について考察したものである。

その結果、日本語世代が「EGL」を、第二世代が「EGL+国語」を、第三世代が「EGL<国語」あるいは「国語のみ」を話す、という3種のパターンであると窺える。ただし、このうち、日本語世代に見られる結果からは、時代の変遷による影響を受けず、「EGL」が主要言語として使われていること、そして、第二世代に見られる結果からは、時代の変遷により、国語の多用から、国語とEGL両方を同程度使用することへと使用率が変化していること、および第三世代に見られる結果からは、場面や対話者により、日本語・英語の使用が見られることが分かった。

各世代が用いる主要言語は異なっていたものの、3 世代の使用言語選択における内的要因と外的要因があり、相互に影響し合っていることが明らかになった。前者は「該当言語にない言葉」と「該当言語が文字を持たない」の要因であり、後者は1) 該当話者の習慣・言語能力・経験、EGL に対する伝承意欲、その言語あるいは時代に対する評価や言語学習の仲間意識の象徴などの「個人の立場」、2) 対話者への配慮、職業の性質、その領域あるいは居住地の環境や台湾社会のグローバル化などの「台湾社会を営む立場」、3) 「台湾の歴史・言語政策」という3つの要因である。

古代文字（甲骨文・金文）における構成要素に関する一考察 —現代漢字及び現代記号（アイコン）との対照比較を通して—

ダリア・ヴィノグラードワ（言語文化専攻博士後期課程）

グローバル化が進行し、インターネットが益々普及する現代社会において、共通語を持たない人々がコミュニケーションできるように、国際補助語をつくる試みが数多くある。表意文字を使う漢字文化圏に固有の表現方法が非漢字文化圏にも見られ、原始的なピクトグラムから現代の漢字に発展した中国の文字と現代記号との間には、共通点が見られる。たとえば、「取扱注意」という現代記号と「共」という漢字の古代字形とを比較すると、共通の表現法を見出すことができ、古代字形と現代記号の上記のような発想的な類似性及び表現手法的な類似性が多いケースで例証できる現象であるように思われる。

本発表ではまず、古代文字の構成要素を以下のパラメーターで考察する。

1. 空間配列の変化

構成要素の空間配列は意味を表す手法の一つであり、重要な役割を果たしている。同じ要素の配置換えによって異なる意味が表現されている例も少なくない（共、受、至の古代字形）。その特徴は、現代記号に見られる（上下関係：軽い—重い、地位が高い—地位が低いなど）けれども、現代漢字では、形式的であり、構図から具体的な意味が簡単に読みとることが出来ない字が殆どである。

2. 拡大—縮小

文字の一部を拡大し、それに注目させるのは、古代文字によく見られる表現手法である（指、手、足跡、目の拡大など）。

3. 抽象化—具体化

構成要素は比較的に抽象的であるけれども、字の一部の具体化は意味を表す手法の一つである（人を表す部分における指の有無など）。

4. 静—動

古代文字の中では、静止的な（static）字だけでなく、動的な（dynamic）字も少なくなく、「走」、「奔」などの古代字形に見られるように字の構図には躍動感があり、文字の意味を理解させる方法である。

次に、比較的に少ない構成要素の統合により生成された古代文字を現代漢字及び現代記号と対照比較し、その構成的な特殊性及びその構成部分の役割について論述したい。